

英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

－目的・場面・状況を明確にした授業設定と

スモールトークの段階的指導を取り入れた活動を通して－

鯨川村立鯨川小学校 教頭 荒井 智

1 研究の趣旨

学習指導要領の中でキーワードとなっているのが「言語活動」である。コミュニケーションを行う目的・場面・状況などに応じて、聞いたり話したりする力をつけることが重視されている。つまり、理解していること・できること「知識・技能」を、目的・場面・状況に応じてどう使うかという「思考力・判断力・表現力」を育成することが必要となってくる。さらに言語活動の一環としてスモールトークの導入も大きな目玉である。スモールトークとは、高学年新教材で設定されている活動であり、2時間に1回程度帯活動で、あるテーマの基、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることである。

以上のように、誰かになりきって話したり、役を演じて疑似的な対話をしたりするのではなく、指導者や児童が自分自身に関する本当の出来事や気持ちなどについて「思考力・表現力・判断力」を活かし、やり取りすることが大切であるとされている。また、そのような表現の授受を楽しむためには、児童が既習表現を想起できるような指導・援助を行い、既習表現や対話を続けるための基本的な表現の定着を図ることも併せて重視されている。

そこで本研究では、

- (1) 「目的・場面・状況」を明確にした、自分の気持ちを考え話す授業設定
- (2) 「会話を継続するための技術の段階的指導」の工夫
- (3) 学習指導要領の3観点の適切な評価法

(1)(2)を主なテーマと設定し、新学習指導要領の新しい3観点における適切な評価法についてもあわせながら、研究を進めていくことにする。

2 研究の概要

- (1) 「目的・場面・状況」を明確にした、自分の気持ちを考え話す授業設定

言語活動の提示⇒活動Ⅰ⇒中間交流⇒活動Ⅱ⇒振り返り

- (2) 「会話を継続するための技術の段階的指導」の工夫

会話の始め方と終わり方、あいづちやつなぎ言葉、相手の言ったことについてへの質問、さらに自分の考えや気持ちの伝え方の指導

- (3) 学習指導要領の3観点の適切な評価法

毎時間の評価規準と評価方法の設定、評価補助簿の作成、パフォーマンステストの実施

3 成果と今後の課題

- (1) 研究の成果

- 事前事後アンケートを比較すると、全ての項目で良好な結果となった。
- 目的・場面・状況を適切に設定することで、子どもたちの「自分自身のことを伝えよう」という意識を高めることができたと同時に、会話の続け方を指導したことで、友達の話の内容について、積極的に質問しようとする姿が見られた。

- (2) 今後の課題

- 専科単独の授業、専科とALTの授業等におけるさまざまな形態における活動や、互見授業を行うなどして授業の組み立て方の研究を進めていく。
- ペアやグループ等の形態を効果的に取り入れることで、さらにコミュニケーション活動を意味のあるやりとりにしていく。